



二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 神楽陽子

挿絵 ごまさとし

第一章

聖騎士降臨〜ザクラリッター・ミズキ参上！

006

第二章

口淫大会〜白濁する変身ブローチ

053

第三章

掃除と胸奉仕〜牡汗臭き聖なる戦い

110

第四章

生殖祭〜ザクラリッター敗れる！

173

登場人物紹介

Characters



あさくらみずき
浅倉瑞希

鐘琳学園の女生徒。小柄で顔つきも幼いが、巨乳の持ち主。成績は悪く、運動神経も鈍い。しかし人当たりはとてもよく、クラスのマスコットの存在。

みどうさや
御堂沙耶

瑞希の同級生。長身で脚も長く、運動神経抜群にして頭脳明晰。ただ、人付き合いは苦手。

プリン

天界から地上界へと下りてきた天使。地上界では原型を留めるため、普段は瑞希のマイグルミに憑依している。

「ささ、さあザクラリッターちゃん。次はな、なにをしようか」

しかしその腕を黒須が掴んで制した。

「お前はミズキの後ろに回れ」

山内は不満そうに教師を睨んだが、目が合うやすんなり指示に従った。ザクラリッター・ミズキの背中側に回り込んでくる。

最初に山内の手が触れたのは、瑞希の背中に留まっている黄色の蝶だった。

「こ、これがザクラリッターちゃんのい、衣装かあ。ぼぼ、僕は衣装にはうるさいよ」

元はスカーフである蝶の羽根や足を引っ張っては、妖しく眼鏡を光らせる。続いて彼は美少女戦士の手首から二の腕に至るまでを撫で、袖を鷲掴みにした。異性に触られるというだけでも瑞希にとっては緊張の対象であるのに、触っているのが山内なのだ、彼の手を通った跡には無数の鳥肌が蘇る。

「ひ！ やあやだ、触らないで」

だが瑞希が腕をねじって抵抗を示してみせたところで、山内は躊躇するどころか、逆に動くオモチャにいよいよ目を輝かせた。さらなる反応を獲得すべく手を這わせてくる。

「へへ……誰かザクラリッターちゃんで同人誌描いてくれ、くれないかな」

血管が浮き出るまでに痩せた彼の手は、瑞希の露出した肩を撫で、水着の肩紐を指でなぞり、それから胸元のブローチをカツンと叩いた。そして純白の制服越しに巨大な桜餅を

わずかに揺らすと、制服の襟に沿ってまた後ろへ戻っていった。うなじのすぐ下にあるア
リステイアリボンの柄もきっちり撫で回す。

山内の手は制服のすべての縁をなぞっていった。皺のひとつひとつにまで丁寧指を走
らせては、時折裾を引っ張り、新たにできた溝をまたなぞっていく。その動きはあまりに
精密で、まるで迷路を辿っているかのようでもあり、その緻密さがザクラリッターにおび
たらしいまでの悪寒を強制する。

「うう、お願いもう、もう動かさないで」

直接肌を触られたわけではなかったが、瑞希の神経は衣服にまで及んでいるようだった。
ボディラインを確かめられているかのような、そんな錯覚に陥りもする。しかしいままで
はあくまで錯覚でしかなかった。今度は美脚を直接撫でられ、続いて胴に密着した紺色の
布地に手を這わされる。まるで虫でも見つけたかのような表情で少女が叫んだ。

「やっ！ 水着も触っちゃだめ！」

ただでさえ暑くしかも度重なる緊張状態のために脂汗が多量に生じ、スクール水着は少
しばかり湿ってしまっている。当然水着なのだから肉体に密着している、だから触られる
ことは身体の線をなぞられるに等しい。

瑞希は後頭部に腐乱臭が吹きつけられているのを感じ、さらには髪同士が接触したこと
を敏感に捉えて、はだけた肩をビクンと跳びあがらせた。

「うわあ、触らないで、離れてよう」

今度は髪の本一本に至るまでが山内という櫛に梳かれてゆく。神経の通っていないはずの赤い糸が一斉に根元の脳に信号を送り込む。髪留めリボンも痙攣する。

手入れのされていない不潔な爪が少女の内股を引っ搔いたとき、瑞希はこの男こそを裁かねばと蟹股のまま拳に力を込めた。そこで、指だけは動くことを思い出す。

「あ、あっちいきなさい！」

嫌悪を次第に憎悪へと昇華させながら、十本の指をもって彼を突き放そうとする。だが、その指の蠢きすら男は都合のいいように解釈した。

「お、女の子が僕を触ってる。そうか、ゆ、指は出てるんだ」

変態男に露出した指をいくつか摘まれ、いよいよ瑞希の顔も険しくなる。山内は彼女のほだけた両肩を後ろから押さええにかかった。そして粘り気の強い舌を出し、赤い髪が絡みつくこともお構いなしに瑞希のうなじから後頭部を舐め始めた。男の顎で体操リボンの柄が操られ、そのたびに水着の内側がわずかに穿られもする。

むちゃ、むっちゃちゃっ

初めて異性にされるキス。荒れた唇が瑞希の肌に直接囁く。

「そおだもう、もうひとりはどうなだろう。もうひとはどこか、お、教えろ」

瑞希は触覚に嗅覚、そして聴覚さえも麻痺してしまえばと思いつきながら、救援の到来をよ

り強く願った。だが、待てどもザクラリッター・サヤは来ない。

(沙耶どうしたの、あたしはここだよ早く来て！)

「女の子のにおい、いだ。く、臭いな」

なのに、いま一番いらぬ男は傍にいる。クラスでおそらく最低の男に臭いと言われ、シヨックよりも苛立ちを覚えた瑞希は後頭部による頭突きを試みた。しかし体勢のためか大した威力が出ず、山内の頭はすぐ復帰する。しばらくはそうやって押し合いへし合い。

「おーおー、どっちも必死じゃんか」

ビギナー同士のもつれあいに観客は皆苦笑した。そんな中、宿敵黒須が美少女戦士の前に立ちはだかる。

「今度は正常なモノを啜えさせてやる」

瑞希には、モノという語がなにを指すのかすぐには理解できなかった。「啜えさせてやる」という述語からその意味を推論する。すると、頭に浮かんだ解答に口内が渴いた。

「さ、さつきもうやったでしょ？」

「あれがしたうちに入るか。こういうモノをイかせて、一人前だ」

黒須が取り出した肉塊に、包莖しか知らなかった少女が目丸くする。

「そ、それが……なの？」

いまま後頭部で汚い吸盤を飼いながらも彼女は触覚を忘れ、目を疑った。十五センチは

あろうかという肉製の棒が、六十度もの角度で上に反り返っている。根元から先までがほぼ同じ太さをしており、特に瑞希はその先端に驚いた。

(種のついていない苺、かな。それみたい)

苺という表現は、これから啜えることを意識したゆえだろう。

「そいつの包茎と一緒にするな」

「ほ、ホウケイって……え!? なんなの、山内くんなにしてるの?」

突然山内が次の段階に移行した。瑞希からは見えない位置で腰を床近くにまで下ろして、ずんずんと前進してくる。間もなく、紺色の尻をぶよぶよとした感触が襲う。

観客の視点からは一目瞭然だった。山内が一応は勃起したもののやはり情けない陰茎を、ザクラリッター・ミズキのヒップに擦りつけ始めたのだ。

「おい山内のチ○ポ見てみるよ。小っせーの!」

(おちん○んって? これってまさか!)

その異質な感触が陰茎のものだと認識するや、抵抗を忘れていた瑞希の十指が接触地点に急行する。彼女は手探りで、尻に擦れている山内の軟体レバーを探し当て、リストバンドからはみ出た十本の指すべてを動員してそれを追い返そうと試みたが。

「お、おとおザクラリッターちゃん、また!」

かえって男を悦ばせてしまった。変身少女の指で睾丸を鷲掴みにされた山内が、それを

で、まずは申し訳程度に陰茎を舐める。

「しっかり舐めろ」

タキシードからはみ出した棒が縦線になって美少女戦士の顔を二分した。裏筋が湿った額にぺちぺちあたれば、赤い髪がその分鈴口を撫でる。

「んあま、んらっふ」

自分から異性への、初めての能動的な舌愛撫。清き天使の顔にはあまりに不似合いな肉塊が、根元をねぶられたお返しとばかりに少女の鼻の先を浮き出た血管で撫で返す。

るちゆりちゆ、ちゆびゆあ

それでも瑞希は舐めた。人肌ほどの温かさを持ったホットキャンディーに唾液で線を引く。舐めていれば唾液腺が勝手に蜜を分泌して黒須の男を濡らしていく。次第に瑞希本人の唾液臭が強くなってきた。

「はっあむ……んっあら」

瑞希の、自分の顔ほどの長さを持つ陰茎への舌奉仕。

その様子を山内が悔しそうに探っている。だが彼に教師の邪魔をするだけの度胸はない。ただ変身少女の両肩を押さえて、潰れた陰茎をお尻に擦りつけてくる。

瑞希にとってはたったいま舐めている排泄器官より、背中側の指の隙間で蠢く肉塊のほうか、ずつとずつと汚らしく感じられた。

積極的なアプローチと解釈してか腐肉をさらに押しつけてくる。加えて彼の手が肩から頬へ、イヤリングへと上ってきたので、いよいよ瑞希の嫌悪が憎しみに変わる。

しかし魔の手は、さらなる魔の手に阻まれた。

「勝手なことをするな。貴様は身体を触っていればそれでいい」

黒須は狂人の手をどけると、瑞希の後頭部へと右手を回すことで彼女と山内の間に割って入った。不潔な変態と距離を取ることができた少女がほっと安堵の息をつく。しかし眼前に迫った肉の塔が、口淫実習生を早くも黒い現実へと引っ張り戻す。

「舐めろ」

どうせフェラチオさせられるのだらうと予想していたため、瑞希は以前より冷静に怪物を観察することができた。いま鼻の傍にまで迫っている物体は山内の陰茎に比べると明らかに太く長い。やはり先程のものと比較すると醜いという評価も失せたとし、悪臭がないことも救いだった。

（これ、本当におちん○ん……なの？）

しゃぶる以外に選択の余地はない。しかし今回は「山内よりは」という確信が、聖騎士に新たな怪物との決闘を可能にさせた。

「ん……んあっ」

瑞希は浮き出た血管を恐る恐る舌先でなぞった。当然抵抗はある。わずかに最先端のみ

(離れて、もう、離れてよう!)

乙女は山内の寧丸を驚掴みにしてできるだけ遠ざけようとしたが、その力は男にとってやはり悦楽でしかない。押せばその分掴んでもらえることに山内が気付いたのだろう、腐った男根が、しきりにアプローチをかけてくる。

もちろん、瑞希が対応しなければいけない陰茎は一本ではない。

「どうした。口が止まっているぞ」

ティアラで照明の光を反射させた美少女戦士は意識を改め、とにかく格が上のものに集中することにした。男子たちの含み笑いが羞恥心を思い出させもするが、黒須の下半身を隠れ蓑に、舌を垂らしては陰茎に唾を塗り込んでいく。

「ふあ、こお? こえで、いひんでしょ?」

山内への口奉仕とは明らかに違った。亀頭の向こうにプリンを見据えながら、反射的に舐めるのではなく、意識的に味覚器官を動かす。稚拙になりこそすれ、ザクラリッターが持ち前の彫刻刀で陰茎の形を頭わにしていくな。

「ふふ、素直になつたじゃないか」

瑞希は聞こえない振りをした。肉を舐め慣れたなどと思われたくない。

やがて、彼女が苺と例えた亀頭の高度がさがってきた。鈴口が鼻をなぞって、蠢く舌への接触を求めてくる。乙女が本当の牡の牡においてはとす。

(酸っぱい感じ……いまのが、おちん○んのおいなの?)

黒須は左手で瑞希の顎を持ちあげると、その指をもって両の頬を強く圧迫してきた。エメラルドグリーン của イヤリングが中央に寄っては離れる。

「啞えろ」

縦長に開かされた唇の隙間に凜々しい男根が挿入された。口内にまで運ばれてきた給食を女生徒が舌で追い出しにかかるが、その程度で肉バナナが折れはしない。

「ううつぶ、うつぶ」

舌は反射的にそれを舐め回し、口内に入ってきた異物の調査に入った。しかし亀頭の確認が終わらぬうちに続く肉が侵入してくる。黄色く大きな蝶を背負った瑞希は指で山内の陰茎をまさぐりながら、舌ではいま啞えている物体の輪郭を再度追った。

「ん！ んんうっうーんうっ」

しかし巨根が入り込むほど、小さな唇の裏側では舌が自由に動けるだけの空間が狭まり愛撫に支障が生じた。牡の肉で口内を飽和させながら、それを呑み込みきることもできず、また吐き出すこともできない。食物を分解しようとただ唾液を分泌し続ける。

(さっきのに比べたら……まだ。ちよつと太いけど)

それでも瑞希は黒須を幾分素直に啞えていた。山内の腐った陰茎との比較考察が彼女を楽にさせた。いまも尻のほうでは迫る汚物に全面抵抗を継続していたが、口のほうでは、

乳の谷間へと落下していく。

(こんなに溜まってたんだ……)

瑞希が関心を示したのも束の間。

「おーおー、すげえ涎だな。美味そうにしゃぶってんじゃんか」

そんな細かいところまでが観客にも見えていることを知って紅潮する。口淫実習生は膨張する羞恥心に負けじと、思い出したように沙耶への期待を膨らませた。

「んぶ、さひゃ、たぶけて沙耶！」

呼吸をしながら、ペニスをしゃぶりながら、それでも声を出そうと舌が大暴れする。しかしろくな声も出せないまま唾液の池を掻き回すだけの結果となり、再度涎の滝を流してしまう。零れるのを食い止めようと顔を右に傾けていたため、今度の汁は真下のブローチを外れ、右乳首の真上にあたる襟に染みを作った。

ぶりゅ、ぶごぶつ

瑞希は逃れようとばかりしているのだから当然口淫も稚拙になる。すると、教員が女生徒のために頬を掴んで手解きに出た。

「こうするんだ」

黒須が鼻を強く押さえたまま、縦長に開いた淫具の中で自身をストロークさせてくる。左右に狭まった仕事場では舌が逃げるスペースなどなく、頬を押さえられているためにザ

クラリッター・ミズキは歯を立てて抵抗することもできない。

(どうしてあたしが、こんな目に遭わなくちゃいけないの?)

瑞希はツインテールを脈打たせながら怒りすら抱いた。だが口を封じられているために弁解することもできず、肉をもって愛を強要される。

「うばぶ、んんっびやらぶ！」

ようやく少女は巨根の脅威を認識した。においだけが取り柄の円錐型では不可能だが、弓なりに反り返った男根は喉元にまで硬い実を届けてくる。そのたびに息が詰まり、通気が確保されたかと思えば、途端に牡の気が食道を侵食する。

同時に、股を開いたままの美少女戦士は尻の側でも戦いを繰り広げねばならない。

「はあつあまた出る、ザクラリッターちゃんのおシリにで、出る！」

絶頂を予告した臭い男が勢いをつけて腰を進ませってきた。口側の男根に集中しすぎたせいもあつたが、突然の奇襲に指のバリアを破られ、紺色の尻との接触を許してしまう。瑞希はすかさずそれを追いやろうとしたが、彼女が十指で握った瞬間ポンプが弾けた。

どぐ……どくる、ぶちゅ……

瑞希自身が十本の指で丹念に練りあげた陰茎が、包皮の隙間から次々と精液を滲み出す。白濁液は彼女の指だけでなくリストバンド、さらには尻をも水着越しに汚し、生き物らしい熱を伝えてきた。十本の指それぞれが別の指との間に粘り気の強い糸を引く。まる

で精液の詰まった風船を素手で割ったかのよう。

しかしその粘りを嫌悪している暇などない。上の口を男根で激しく穿られる。
ずちゅつちゅ、ぢゅずつ

胃まで到達することのない、しかし外へ出ていくこともないもどかしい食物が口内の粘膜と交じりあった。口を極限にまで開いているために、淫猥な音のすべてが漏れ、舌は亀頭と竿とを繋ぐ筋の上を往復させられる。

「ひとつ、はあ、言い忘れていた」

荒くなった黒須の吐息の意味を瑞希はまだすぐには理解できなかつた。それよりも、排出した粘液を尻に塗りたいくってくる肉団子に一瞬意識が向かってしまう。

「俺のは飲んでみせろ」

(飲めつてまさか、んむう！)

舌を押し返すほどに亀頭が何度も膨らんだ。その回数分だけの牡汁塊が舌の上を幅跳びのごとく跳んでいく。

すぐにも、わずかに舌が動くことのできたスペースが汚液で一杯になり、舌のみならず口内のあらゆる面が、山内のとときと同じ牡の臭みを伝達する。

「うびゅ、の、飲めないびよお」

「忘れたか？ プリンが死ぬぞ。飲め」



男根に対する汚物感と嫌悪感は頑なにその汁を飲むことを拒否するのだが、思考の範疇に戻ってきたプリンを助けようとする意思が、少女に飲むよう命令する。

(そうだあたし、プリンを……頑張って耐えなくちゃ)

しかし鼻を摘まれているために口は息をせねばならず、それでは呼吸を鼻孔に任せて汁を飲み込むことができない。瑞希は呼吸という、生き物なら不可欠であるはずの生理を止めてまで、ペニスから噴射された精液を摂取しなければならなかった。陰茎を咥えたままなのだから吐き気も起こる。

「ん……んく、んぐう」

口内の液体と指の間の液体が同じかどうかを考える余裕などなかった。ただどちらも熱かった、それだけを確認はする。

ザクラリッター・ミズキは、なんとか子種に食道を泳がせることに成功した。

「んう、うぼ、ぼぼっ！」

解放されれば当然咳き込む。外側ではなく内側を犯された瑞希は、一度飲み込んだ牡汁が戻ってくればいいのにとさえ思った。

そのころには尻のほうもようやく山内から解放された。両手とともに精液まみれにした美少女戦士が早速その手を拭おうとする。しかしハンカチもティッシュもない。仕方なく瑞希は、拘束された手の届く範囲にあったスカートの帯で手を拭いた。

こうしてブローチや襟に続き、スカートの先端にまで精液が付着することになる。彼女は汚れた衣装を着ているのだと強く感じた。視線を下ろせば、汗とは別のもので湿った谷間や、変色したブローチ、襟の表面では白く濁った盛りあがりが見える。

「どうだ、俺のチ○ポの味は」

瑞希は顔をあげ、頬張る前とは明らかに異なる容姿をした唾液でぬめる肉根を凝視した。やがて唇を噛み締め目を逸らす。

(いままであんなのを……く、啜えてたなんて)

女生徒は答えなかつたが教師はそれ以上言及しなかつた。代わりに黒須は、射精の余韻に浸っている変態男に接近した。

その男、山内は飽きもせずまたも変身少女に手を伸ばしてきた。その手を黒須が制す。しかし山内は劣情に瞳を燃やし、教師に睨みを利かせたのだ。

「じ、邪魔をす、するな。僕はザクラリッターちゃんをもっと」

「ルール違反だな。退場願おう」

突然、開いた窓から大きな釣り針が飛翔した。その先が山内の上着を引っかけ吊りあげた。針は強靱な糸をもって天と繋がっているらしく、違反者は瞬く間に夜空へ吸い込まれていった。男子一同が笑顔で手を振り、プリンも風で身体を揺らす。

「ま、まさかいまのって！」

瑞希は牡液の味も忘れて嘔みついた。間違ひなく先の現象はザクラリッター・サヤの力であつたはずなのだ。驚きが、徐々に悪い予感へと変わつていく。

「このタロットに見覚えがあると思うが？」

黒須はまさしく沙耶のタロットで扇を作つた。

キーン、コーン、カーン、コーン

そこでようやく、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴つた。

※

チャイムが鳴り終わるや、瑞希のすぐ隣の空間に突如ある物体が出現した。やたら低い椅子と、それに座つた状態で拘束されている美女。グローブをはめていて、やたら両腕は背もたれを挟んで縄で縛られ、低い椅子のせいかわげに長く見える黒タイトの先端も同様にまとめられている。瑞希はよく知るその美顔に目を疑いすらした。

「沙耶……どうして」

大人びた白い肩や黒い脚線美、ハイヒールがぶるつと震える。クラス一の美女は妹分から目を逸らすと、水着の食い込む内股をキュッと締め、頬を赤らめて俯いてしまった。

「男子諸君には一応紹介しておこうか。彼女がザクラリッター・サヤだ」

観客一同が沸く。反面、ザクラリッター・ミズキは残念に思う。

「そんな、沙耶まで捕まっちゃつたなんて」

と、この時間が何事もなく終わりつつあると内心喜んだ。

しかしザクラリッター・サヤはまだ陰茎を谷間に挟み込んですらいらない。沙耶は相手の下腹部にはだけた胸を接触させてはいるのだが、そもそも肉が足らないので挟むことができない。なのに男は急かす。

「早くしろよ。ザクラリッター・ミズキはもう終わってんだぜ？」

それがつらかった。隣で巨乳が揺れていたからこそ、沙耶は男たちの欲深い視線から逃れることができていたのだ。しかし、いまは男子全員の視線がザクラリッター・サヤに集まっていた。相棒も乳房を手で隠しながら沙耶を見守っている。

「一応最後までしてもらおうぞ。ミズキだけやらせて終わり、では不公平だろう」

黒須を筆頭に、男どもが下卑た笑いを浮かべた。何匹もの狼に焦点を合わせられていることを肌で感じた沙耶が、早く火を起こそうと躍起になる。もうひとりの女生徒はすでに課題を終えていたので、まるで居残りさせられているような気分にもなる。

（私ひとり残ってしまうなんて……）

ずっと成績優秀で通ってきた彼女には初めての体験だった。しかし彼女はいま御堂沙耶ではなくザクラリッターである。男たちの注意を引くにはちょうどよかったし、しばらくはパートナーを休ませてやることができる。

とはいえ、彼女はなにもパイズリをわざと遅らせたり、なまけていたわけではなかった。早く恥辱の居残りから解放されたいという気持ちも当然ある。

「時間稼ぎかあ？ まったく、こっちのザクラリッターは本当に卑怯だよな」

しかし乳房に陰茎が絡むことのないあまりに稚拙な胸奉仕に、相手の男が呆れ顔で美少女戦士を見下してきた。時間稼ぎをしているのではなく、下手でもないことを証明するため、ザクラリッター・サヤがスカーフを従えて男の股間に突撃する。

胸が平らなので瑞希以上に接近せねばならず、男のシャツに顔を埋めるまでに至った。

「ふ、ふっう、んんっ」

ティアラを押しつけた男の胸元では酸素を探しながら、股間では陰茎を搜索する。しかし、ただでさえ萎えている男根を貧乳で拾いあげることができず、男の脚に乳首を擦りつける結果にしかならなかった。彼女自身、単純に肉が足りないことを自覚している。

「おいお前、本当にパイズリわかってんのか？ 早くしてくれよ」

沙耶は睨みつけたシャツに自身の頬を重ねてさらに距離を詰めると、マジシャングローブを介入させることでやっと牡肉を持ちあげた。しかし谷間には浅いせいで収められない。勉強もスポーツも得意な優等生にとって初めての苦戦だった。男子生徒たちのためでもあるとはいえ、やはり罵声に対しては憤りも感じるザクラリッター・サヤ。

（く……誰のためにしていると思ってるのよ。罪の想念から守ってあげてるんじゃない）

沙耶の姿はまだ牡汁による侵食をそれほど受けてはいない。スカーフの先端は二時間目に男が拭った精液が付着しており、ブローチ周辺が濡れて異臭を放っているくらい。瑞希同様に顔を拭くのに使った袖も萎んではいるが。

全身を白濁させている爆乳娘に比べると、特に髪が装いを異にしていた。時折教室に吹き込む風で薄紫色のストリートヘアが見事に靡く。

だが、そんな髪の毛の根元たる美顔は瑞希に劣らず白く濁っていた。ティアラの浮き彫りに溜まっていた不味そうな水飴が流れ、沙耶の整った顔の輪郭をなぞっていく。

(う、臭い。どこから流れてきているの?)

ザクラリッター・サヤは眼前の男のシャツで眉を拭うと、平らな乳房を掴むことはできなかったがそれでも両脇にグローブを添え、羞恥以上に無力感ももたらす胸奉仕に入った。

「ん……んはあ、はあ……」

膨張しきつていない柔らかな肉棒を平らな胸肉で勃たせることは困難を極めた。乳首から標的を零すたび、男と胸の間に手を差し込まねばならない。手で扱いてから挟むという考えは、経験のない沙耶には残念ながら浮かばなかった。相手が不満の声をあげる。

「そんなんじゃあ、いつまでたつてもイけないだろ！」

沙耶は懸命に胸の肉を擦らせてはいるのだが、谷間が浅く、陰茎とうまく絡まない。

「は、早く出しなさいよ」

「だったらもつとちゃんとしろよ。出せないって言ってんだ、このグズ」

とにかく男を擦らねばと、運動神経に長けた彼女は身体全体を上下させ、肌で男根を擦り勃たせた。まるでうさぎ跳びをしているかのような全身の跳躍で、髪がマントのように翻る。

「は……はあ、勃って……勃ち、なさい」

そうまでしても手を少し動かすだけで膨大な刺激を生産できた爆乳の持ち主には敵わないと、ザクラリッター・サヤがパートナーを意識したとき、黒須が傍に寄ってきた。先程からずっとメモ帳にペンを走らせている。

「罰ゲームは貴様が受けることになりそうだが、点数は最後までつけてやらないとな」

彼は美少女戦士たちのパイズリを数値化し、低いほうに罰ゲームをさせるつもりらしい。ザクラリッター・サヤの、睫毛にまで精液を載せた美顔がタキシードの男を睨む。

「そ、それがどうしたのよ。どうせまた趣味の悪い罰ゲームなんでしょうね」

すると、彼が沙耶にだけ聞こえるくらいの小さな声で答えた。

「ふふ。負けたほうを、次の時間とびぎり臭いチ○ポで犯してやろうという寸法だ」

だが小声とはいえ、居残り中の美少女戦士を絶望色に染めるには充分だった。本当の強姦が迫っていることに聡明なはずの思考も切羽詰まる。

「そ、そんな。ウソでしょう」

「なあに、諦めるにはまだ早いさ。速度はあくまでひとつの要素でしかない。それに俺は、貴様の全身のバネを使つてのパイズリを高く評価しているぞ」

一瞬、ザクラリッター・サヤ流のパイズリが加速した。グローブを動かしても仕方がないと思ひ、ならば代わりとばかりに上半身そのものを上下させる。髪とスカーフが水母のように広がっては閉じ、床に寝そべったタイツを上から撫でる。

「まあ、仲間を助けてやりたいのなら負けでいいではないか」

しかし、あろうことか敵に瑞希との友情を叩き起こされてしまった。一瞬とはいへ、仲間より自分を優先させた自分が恥ずかしい。悔しい。

「そ……そんな。だったら私に……どうしろと」

ついには背中にも迫つた強姦の恐怖が全力を要請する一方で、仲間を救いたいという当たり前の気持ちを手を、上半身を硬直させた。動こうにも動けない。

キーン、コーン、コーン、コーン

しばらくして鐘が鳴つた。パイズリを中止しようと、沙耶が汗ばんだグローブを降下させる。しかし黒須はそれを許さなかつた。

「勝手に終わるな。まだイかせてないだろう」

「で、でもチャイムは鳴つたじゃない」

教師役は首を振り、残つた女生徒に続けるよう命令した。

「仲間はやりとげたというのに貴様はしないつもりか。卑怯者め」

沙耶自身は卑怯でいるつもりなどなかったが、自分だけが放棄するわけにはいかないという気持ちも確かにあった。それに、時間をかけるほど五時間目を短くできる。

とはいえチャイムが終わってからまだ続くという、優等生には無縁だった「居残り」が、いよいよザクラリッター・サヤに己の無能さを実感させた。

「はあ……ねえ、まだなの？ お願ひ早く……早く、はあはあっ！」

初めは落ち着いてもいたが、観客一同がまたペニスを取り出してみせるや恐ろしくなつて全身スクワットを加速させる。しかし相手にはあくびをする余裕すらある。

「ふああ。いつものタロットカード使えよ、あれでなんかできるだろ」

いまの美少女戦士に武器はなく、想念の影響で身体能力も低下している。ただザクラリッターとしてのプライドと瑞希への想いでこれまで戦ってきた沙耶であったが、度重なる屈辱感と無能さの自覚が、ついに聖なる意志に亀裂を走らせていく。

「はあ、早く、早くよ早く！」

沙耶はラストスパートのつもりで、男の腰を掴み、胸元を何度も叩きつけた。スクワットによる上半身の高低は大きく、時折顎が亀頭を直撃する。

焦る手袋は平らな胸を何度も掬い損ね、ずれた水着の肩紐ばかりを引っかけあげていた。その上層では丸いイヤリングが、汗で深く変色しているタイツの屈伸に合わせて跳ねてお

り、背中では黄色いスカーフが蜘蛛の巣にかかった蝶のようにもがいている。

「は、はあっはあ……はあっ」

しかし最大速はそう続かず、荒くなっていく呼吸とは裏腹に肢体の動きは次第に鋭さを失い、ついには呼吸に集中するため上半身の上昇下降がぴたりと止まる。

「はあ……はあ……、はあっ……」

ザクラリッター・サヤの吐息だけが教室に響いた。居残りまでしているのに課題をまるで進められない惨めさが、いまは羞恥心を凌駕し、内面だけは美少女戦士を少女に戻す。

「う……うっ……」

奉仕の対象である男根は未だ蜜を分泌していないというのに、沙耶の涙腺は水分を生んだ。居残りもさることながら、親友に弱い自分を見られているのが恨めしい。

「ねえ、沙耶を許してあげて。もういいでしょ？」

その親友が厳しいだけの教師に願い出してくれた。

「だめだな。それともお前が代わりにやるか？」

しかし黒須は承諾しない。その返事に続いて、痺れを切らしたらしい男どもが次々とパイズリ中のザクラリッター・サヤに罵倒を浴びせる。

「おい、いつまで待たせんだよ！ 五時間目がなくなるだろ！」

「時間稼ぎすんな！ ザクラリッターのくせに、やることが卑怯なんだよ！」

ザクラリッター・サヤといえど、正体はごく普通の女の子でしかない。特に「ザクラリッターのくせに」という言葉が彼女の心を抉った。聖騎士なんかなりたくてなったんじゃない、という理不尽な後悔が湧きあがる。卑怯呼ばわりも悔しい。

「私にだってできないことがあるのよ、もういいじゃない……ぐずっ、早く出して」
いつしか大人びていたはずの美顔は少女の泣き顔になっていた。無能者ならではの無力感が、ザクラリッター・サヤをただの女生徒どころかおちこぼれにまで変貌させる。

それでも時折、彼女はわずか数秒にすぎないが高速で肌を男に滑らせました。しかし持続できないために効果はなく、また振り出しに戻ってしまう。

「出せないっつってんだよ！」

沙耶は怒鳴り声ひとつで震えあがった。とうとう髪を落ち着かせ、断続的に揺らしていた半身すら停止させる。意地の悪い男どもはその変化を見逃さない。

「大体なあ、ミズキと違って自分はまだ綺麗ですって根性が気に入らねえんだよ！」

「いつまで正義の味方ぶってんだよ。さっさとやれって。イかせろって！」

ザクラリッターでいることがかかつてないほどつらくなった。正義の味方などどうでもよかった、瑞希と友達になりたかっただけなのに、という後悔がまた激しく起こる。

すっかり気力をなくしたコスプレスクール水着美女は、涙で頬の牡汁を拭い落とし、嗚咽の混じった声で応えた。

「ひぐう、イ、イかせれば……いいんでしょう？」

パイズリに限界を感じた沙耶は、土下座のごとく頭をさげて男根を深く深く頬張った。テコキを知らない彼女には口淫以外に目の前の男を果てさせる術がない。

「へへ、だったらやってみるよ……おお」

余裕と軽蔑の笑みを浮かべている男への、屈辱の口奉仕。フェラチオは決して強制されたわけではないが、惨めさから逃れる唯一の方法が男根に唇ですがる以外にないという現実が、無念の口淫の火蓋を切らせる。

ちゅばんっ、ちゅばんっ、ちゅばんっ、ちゅばんっ！

ところが才溢れる優等生の能動的なフェラチオは、瑞希のパイズリ以上に恐るべき可能性を秘めていた。掃除機が無理矢理ガムを吸い込んでいるかのような音が鳴る。ティアラが溜め込んでいた精液を流して美顔を汚すたび、ディープスロートがやり直される。

「んぶっ、ぶ、ぶぶっ……ぶちゅ」

すぼまった唇が竿を抜く中、口内では舌が裏筋を鈴口を亀頭冠を、その他あらゆる箇所をしつこく舐め回す。すべての面をふやけさせる。味覚と陰茎の位置関係が常に変化し、舌の根っこが触れる場所も様々となる。

「な、なんだよこいつ。はあすげえ！ うああ待て、待てって！」

男の余裕が消え、一瞬にして切迫した。それほどまでに沙耶の口淫具は凄まじい。膝か



ら脳天にかけてを上下させるだけではない。髪とスカーフを広げては、ずれた肩紐で二の腕を打ち、ハイヒールのつま先では床を叩いてリズムを取る。

「んっ！ んちゅ、んぢゅつぶ、ちゅぶっぱふ！」

耳が千切れそうなくらいにイヤリングが振り子のごとく揺れてもいる。漆黒の十指で男根の根元を固定し擧丸を引っ張りながら、水着を腰にまとった人魚が泳ぐ。

フェラチオは口だけでなく、全身でするものだと、ザクラリッター・サヤが男を追い詰めるながら証明してみせたのも束の間。

「やべっ、なんだよこれ！ はあだめだ出る、出ちまうっ！」

男の肉竿が短時間で練られたとは思えないほどに大量の汁を噴射する。彼が四肢を脱力させているところを見ると、強制射精にただ翻弄されているらしい。ザクラリッター・サヤの完全勝利である。

「ん、んうつぶ、ごほ！」

自律型フェラマシーンは口を離すや咳き込んだ。そして食道に流れつつあった牡液すべてを、憎しみの念を込めて床に吐きつける。それでも唇からは卑猥な糸が引いたが、あまりに壮絶で一瞬の出来事に、男どもは皆罵倒を忘れ言葉を失っていた。

しかし黒須だけは淡々とペンを走らせ、宣言した。

「ザクラリッター・サヤ、それはパイズリではない。マイナス百点だ」

機械のごとく無心になっていた沙耶に思考が戻るが、遅かった。瑞希は点数化に首をか
しげているが、沙耶はすでに罰ゲームの存在から内容までを聞いている。

だが長身の美少女戦士は絶望より、いまは怒りを爆発させた。黒須に真正面から飛びか
かろうとする。ところが一歩進んだところでまたも高速回転させられる。

「学習能力のない女だな。人質もいるというのに、貴様それでもザクラリッターか」

ザクラリッター・サヤはティアアラが溜め込んでいた液体のすべてを美顔に被りながら、
それでも瞳をいま一度正義に燃えあがらせた。

「はあ……いまに見てなさいよ。あなたは、私が絶対ドキドキさせてあげるわ」

屈辱と怒りをザクラリッターならではの決め台詞に還元する。しかし対する黒須はあさ
つてのほうを向いた。

「それは楽しみだが……甘い！」

黒須がタキシードの中から取り出したアリスティアリボンをもって、たったいま跳躍し
たほうの美少女戦士の脚を搦め捕る。瑞希はプリンまであと少しというところで、沙耶の
すぐ隣へ落とされた。左足首の飾り羽根が汚れたスカーフを下敷きにする。

「痛っ……も、もうちよつとだったのに」

爆乳を精液ブラジャーですっぽりと覆っている戦友が、いまはとても頼もしい。沙耶の
啖呵は実は男どもの注意を引くためでもあった。失敗に終わり悔しくもあったが、ちゃん

と親友が啖呵の意味を理解してくれたことが嬉しい。聖なる意志が復活する。

「次はないと思え。さて、先の勝負の点数を発表するとするか」

黒須はアリス・ステイアリの帯を回収すると、メモを見遣り、ふたりのザクラリッターそれぞれの点数をはっきり述べた。

「ミズキは百点、サヤはマイナス百点だ。罰ゲームはサヤだな」

結局、沙耶には加算すらなかったらしい。あまりに低い点数はザクラリッター・サヤにとつて大きな屈辱だった。ただ、その屈辱もいまはすぐ憤りに変換される。

「罰ゲームなんてどうってことないわ。ザクラリッター・サヤを甘く見ないことね」
しかし、ひとり理解の足りていない相棒が沙耶に尋ねる。

「ねえ沙耶、罰ゲームって……どういうこと？」

黒須の「とびきり臭いチ○ポ」という言葉が思い出される。

黒いタイツが小刻みに震える。それでも長身の美少女戦士が折れることはなかった。

「負けるものですか。見てらっしゃい」

ザクラリッター・サヤは相棒より一步前に出て、はだけた胸を隠すことも忘れ、しばらく黒須を睨んでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>